首書
訓讀

實語教童子教精注鈔

全

浪華 部關牛 著

實語教童子教精注鈔

世に注書の數多あれども其注釈の不足なるもの少なからず　世精を細に編小智愚の人に示して是を文義を曉し其物例を詳にして其義をひらく第一法をひらくに為にやすくして獨り幼童のみならず大人にも亦益あり

筑前 油屋嘉左衛門 甘木

實語童子二教精注鈔序

家諺教九十六句童子教三百三十一句諄々勸懲是所不至今七村師之教幼兒必使誦之良有以也而真諱儒佛混淆間有不易通者部牛蒙氏有憂于此爲此國字辭合二教爲一本題曰實語童子二教精注鈔稿成未及以木而沒今茲嘉永戊戌秋真友人將刻之携素清序試一覽之諱是簡而義是詳使讀者超然自得

五濃文庫

之昔者益軒先生著國字書義千八
海墨蒙此徳世之標行浮文華詞者
裏功業百倍人到千今仰止不已以
予觀之節氏亦益軒先生之流亞也
乃不辞而序
享永三庚戌七月　浪華　鳴門溝口朴撰

實語教精注鈔

浪華　蔀關牛　著

抑実語教ハ宗旨の権実偽正の他ならぬも実ハ弘法大師の他
もう末世の人と教化せんがなり〻偽佛の二教と参考して〻ハ
のふなり実語の二字ハ法華経従地涌出品に我今説実語汝等
一心不信せよ涅槃経巻第二十七正語実語時語真語言不虚發
微妙第一
ごとし

山高故不貴　以有樹為貴
山ハいろ〻ゑるしるしも高ひのみにて八半ばは法の樹林木芝
形もどいるとバ貴ぶものなり淮南子に山高ハ木備しいく

人肥故不貴　以有智為貴
人肥るが故に貴うべ不
人肥るが故に貴うべ不
山高が故に貴うべ不
樹有を以て貴と為

智有を以て貴と為

富ハ是一生の財　身滅すれバ即共に滅ん

智ハ是萬代の財　命終れバ即随て行

人も知るゝ益にハあらじ智恵あるところそたつとぶべきなり書云披書不人なくひ肥て智恵なれハ酒嚢飯袋とて只酒食の袋なりといえり

○大學曰物格而后智至智至而后意誠といへされ善悪をわきまふるものハ智なり荀子曰是是非非謂之智と召智ハ事の可否をわきまふるの智なり儒道にハ仁をさきとし佛道にハ智をもって第一とす

これハ元亨釈書智通論に見へたり

富是一生財　身滅即共滅

富ハ栄花をいふそれハ人の一世にかぎる所の財にて命終ればみな捨て行ものなれバ身に從て滅ぶといふ心なり悲花経に妻子珍寶及王位臨命終時不随者といへる心なり○白楽天も金ハ其身に物として終にハつかへて他の物となるといへり

智是万代財　命終即随行

智恵ハ其人生れても死しても其ままについてはなれぬものなれバ命終るとも從て行とみえ万代の財といへるなり

玉磨不バ光無し　光無を石瓦と為

人學不バ智無し　智無を愚人と為

倉の内の財ハ朽こと有り　身の内の才ハ朽こと無し

玉不磨無光　無光為石瓦

玉ハもと石の中に生じみがきて始めて光をいだすものなれバ玉といへども磨かざれば石瓦にひとしきなり

人不学無智　無智為愚人

人生れながらにして物知ることなし学文をする由ハ智恵をますためなり学バずして智恵なきものハ愚人となる○禮記學記篇曰玉不琢不成器人不学不知道されバ学ぶことあらば人学バざるべからずと知らしめられたるなり

倉内財有朽　身内才無朽

倉の内にたくはふる財ハ盗難火災にて朽果ることもあるべし身の内の才ハいかほどつかふても朽ることなし○孔子も富ハ屋を潤し徳ハ身を潤すとのたまへり韓文に金璧ハ重宝といへども費用て貯へ儲がたし学問ハこれを身に蔵む身在バ則餘りあるといへり

千兩の金を積と雖一日の學に如不
兄弟常に合不 慈悲を兄弟と爲
財物永く存せ不 才智を財物と爲
四大日々に衰

雖積千兩金 不如一日學

たからを遊ぶごとくあきなひバたくさんの黄金をつミかさねるよりもまさる一日勤めたる學文ハおとるべからず

兄弟常不合 慈悲爲兄弟

兄弟ハたとへ父母の遺跡をあらそひ志し同じくならざるもの也 それゆへ不合といふ 唯慈悲をもつて厚く交る時ハ是即ち實の兄弟なり

○論語顔淵篇に君子敬而無失与人恭而有礼四海之内皆兄弟也と云し

財物永不存 才智爲財物

宝をたくはへても火つの難より失ひうしなふ事あり いづくんぞ才智乃宝ハいつまでもうせる事なし

四大日々衰 心神夜々暗

四大とハ佛説にて地大水大火大風大なり 人の五体六分ハ此地水火風の四つのものかりて結合せるなり 此四大日々におとろへて心神もくらく成り 圓覚経に説きたり 心神とハ心ざしのことなり

心神夜々に暗
幼き時勤學せ不ハ 老て後恨み悔と雖 尚所益有こと無し
故に書を讀で倦こと勿れ 學文に怠る時勿れ

幼時不勤學 老後雖恨悔

されば幼きうちに學文せざれバ年よりてのちくやむといへども

尚無有所益

老の來るを待て徒に自ら悔むともかひなし ○司馬温公が勤學歌に汝等各早脩せよ

故讀書勿倦 學文勿怠時

それゆへに物をよミ學文をする事ハ讀書をあげてくたびれなくおこたる事あるべからず ○小學曰朝ハ益し暮ハ習ひ心を小にして翼々とし

眠を除て通夜に誦せよ
飢を忍で終日習へ
師に會ふ雖學不ば
徒に市人に向ふが如し
習讀と雖復不ば
只隣の財を計ふが如し

此と一にして解らざる是を學則とす

除眠通夜誦　忍飢終日習
雖會師之學　徒如向市人
雖習讀不復　只如計隣財

学文をもつぱらにしてもまされば、たとへ讀書の家を忘れぬるう○天台大師の云日夜に他の家と教てもし強いて隣の家とかぞるとも益もなし

君子は智者を愛し
小人は福人を愛ス

君子愛智者　小人愛福人

若し人は必ず智者ともなり小人は徳を懷ひ小人ともなり君子は刑をもりひ小人は惠をもとりとなり

富貴の家に入と雖
財無き人の爲に者
猶霜下の花の如し
貪賤の門を出と雖
智有る人の爲に者

雖入富貴家　猶如霜下花
雖出貧賤門　猶有智人之

富貴とは、薑屠が孝經大義小財足と富とをひ位ると貴とをいふ家の裏に入て俄に重寒を受るもその位に常らざんば

窮達中蓮

たとへ貧賤なりとも智恵ある人は蓮花の泥の中に生

宛も泥中の蓮の如し

父母ハ天地の如く

師君ハ日月の如し

親族ハ譬バ葦の如し

夫妻ハ猶有の如し

父母如天地　師君如日月

父母の我らを育て天地の恩を生じ給ふ事易乾天地の如く故小祥平母父ハ有天道母ハ有地道と云師道ハ君の如く人と神と孝行やゝ同きの如く故小祥平母父ハ有天道母ハ有地道と云師道ハ君の如く人と神と孝行やゝ同きの如く

親族譬如葦　夫妻猶有如

親族ハ葦のむらがり生るが如く夫婦ハ父母の如く生るゆゑに夫婦ハ親族も比せんとなり

○書言故事に釈咸の親族と蔗茅の親族と漢の中山靖王の親族ハ蔗茅なり茅ハ草なり

父母に朝夕孝せよ

師君に晝夜に仕へよ

友と交て諍ふ事勿れ

已より兄に禮敬を盡し

已より弟に愛顧を致せ

父母孝朝夕　師君仕晝夜

父母に朝夕孝せよと定省の孝とつかへまつり孝子のよく定省ハ礼記曲礼上篇に見ハ父母に孝せよと定省の孝とつかへまつるなり父母の家とはゝ父母乃ゆゑ或ハ父母に孝せよと定省と云ふ人のみなる礼ハ父母の家とはゝ父母乃ゆゑ或ハ父母に孝せよと定省と云ふ人のみなる礼ハ父母の家とはゝ父母乃ゆゑ或ハ父母に孝せよと定省と云ふ

友交勿諍事

子仲善人と交る久し一説に人交久則敬衰久而能致敬と善し後ろ

○孔子も晏子乃注に

已兄愛弟敬　已弟敬愛顧

我より兄なる人に礼を尽し敬し給へ○字彙に愛ハ憐なり顧ハ思念なり

人と而智無者ハ木石於異ならず

人と而孝無者ハ畜生於異ならず

左傳にも兄愛ひろく義致あるとて
ちれ六順のあるゆへなり

人而無智者　不交於木石

木石ハ無情ものなり人として智恵あり惡をハなれ
○白樂天が人木石ハ皆情ありとひしも人なる道ハ
ばハ木石にもとゝ〳〵善導大師も恩孝を行ハずんバすなわち
畜生と異なることなしとのつ

人而無孝者　不交於畜生

人ハ万物の霊にして人倫の乃ぶ〳〵なるこゝろあり
れハ畜獣にひとしとあり凡畜生の中にも鳥に反哺の孝ありと
いひて獣にもとゝめ又羊ハ乳をのむ〳〵れひざまづくて恩
いくくられと畜生ハをぐて孝の乃とゝ〳〵ねをもの也親に孝ある
ものハ大福もあるしとのやうにて
いとあるべきなり

三學の友に交らずバ何ぞ七覺の林に遊ん

三學ハ戒学定学恵学のこゝろなり七覺ハ一に擇法覺分とは
法と覺ハ二ハ精進覺分にて無量の苦ハとすてゝ乃法ハ
こゝに弁覺分にてもこゝろ法とゝろ〳〵ゝ喜覺分にて
ものの法とすて苦根と塵垢ハ捨覺分にて無為と云へ
定覺分にて忘無と生ぜハ七に無覺分にて心動せハ捨覺分ハ
七覺のさとりの方ゝ分なり

不交三學友　何遊七覺林

四等の船に乗ずんバ誰か苦の海を渡らん

四等ハ一に家等にて佛の御名二に結等にて佛の御願に三に方等
ハの御方に法等にて御法あり四に諸佛にひとしく仏面に四等と
ハ苦ハ一ハ不生苦にて射のくるしみ二に老苦年ゝとて苦
三に病苦やむ〳〵のくるしみ四に死苦死るゝ〳〵のくるしみ
色別離苦ゝ別の苦しみ六に怨憎苦にくむ〳〵
七に求不得苦求ゆ苦ハ八に法愛苦さ

四等船乗　誰渡苦海

苦のたすけ多し○八苦の一なり○八苦のこれなりかの苦をいとはゞ

八正道廣し雖

十惡の人ハ往不

八正道廣 十惡人不往

八正ハ一ニ心見 二思惟 三正語 四正業 五正命 六正精進 七正念 八正定 ○十惡ハ一ニ殺生 二偷盜 三邪淫 四妄語 五綺語 六惡口 七兩舌 八貪欲 九瞋恚 十邪見 ○十惡の人ハ往生ス

無爲の都を樂むし雖

無爲都雖樂 放逸輩不遊

放逸の輩ハ遊ゞ不

無爲ハ梵語涅槃なり一切苦をはなれ一切樂をもつ○此涅槃を樂せるハ安樂の境界なり○放逸とハ心のまゝにふるまひて惡をなすをいふ

老るを敬ハ父母の如し

幼を愛するハ子弟の如し

敬老如父母 愛幼如子弟

年をとる人ハ我父母のごとくこれを敬ひ幼おさなき人ハ我子弟のごとくこれを愛せよ○孟子曰吾老を老として以て人の老に及ぼし吾幼を幼として以て人の幼に及ぼすべし天下を治むるこゝろもこれなり○詩云刑于寡妻至于兄弟以御于家邦

我他人を敬ハ他人亦我を敬ふ

我敬於他人 他人亦敬我

我人をうやまへバ人も亦我をうやまふ○家語賢君篇人を愛すれバ即ち人是を愛し人を惡めバ即ち人是を惡むとかくこゝろ

己人之親を敬へバ人亦己が親を敬ふ

己が身を達し欲する者ハ先他人を達し今

他人之愁を見てハ即ち自ら共に患ふ可し

人の愁とゝてハ毒にあたるひゝもかゝるゆゑみの情とゝぐべし

○論語に子是日に哭して歌ひ給へる

他人之喜を聞てハ則ち自ら共に悦ぶ可し

人のよろこびとゝきけバ我もまたよろこびつゝべし○論語に子人と歌

ひて善ゝ人ハ必ず是と反せしめて而后あれに和すゝ

己人之親を敬ヘバ人亦己が親を敬ふ

我人の親をうやまへバ人も又我親をうやまふ孟子に

親を敬ふ人又人の親を敬ふゝ

己が身を達し欲する者ハ先他人を達し今

我身を立んとおもふ人ハ先人を發達させむべし論語に夫仁者己を

立んと欲して人を立己達せんと欲して人を達ふ

他人之愁を見てハ即ち自ら共に患ふ

人の愁とゝてハ毒にあたるひゝもかゝるゆゑみの情とゝぐべし

○論語に子是日に哭して歌ひ給へる

他人之喜を聞てハ則ち自ら共に悦ぶ

人のよろこびとゝきけバ我もまたよろこびつゝべし○論語に子人と歌

ひて善ゝ人ハ必ず是と反せしめて而后あれに和すゝ

善を見て者速に行ひ惡を見て者忽ち避よ

善を見て者速に行ひ惡を見て者忽ち避よ

善を修る者ハ福を蒙る

善ハ福を蒙る響ハ響の音に應ずるが如く

惡を好者ハ禍ひを招く

惡を好者ハ禍ひを招く宛も身に影の隨ふが如し

富と雖貧と忘ること勿れ

富と雖貧と忘ること勿れ

貴と雖賤を忘るゝこと勿れ

或ハ始ハ富て終ア貧く

或ハ先ま貴て後ハ賤し

夫習ひ難く忘ま易れハ音聲之浮才

又學び易く忘ま難れハ書筆之博藝

但し食有バ法有り

或始富終貧　**或先貴後賤**

かるがゆゑ盛衰はかりなく富貴なるとも驕れる振舞をすべからず貧の人と争はざれバ貧をするとも亦安しとの戒なり

尊きものもいやしきことを忘れざれバいやしくなりても怨思しおそるゝことなく

○易に君子ハ安而危を忘れず存而亡ぶることを忘れずといへり

夫難習易忘　**音聲之浮才**

音聲の浮才とハ謡浄瑠璃小歌鼓三味線などすべてうきたる藝ハ習ふにはむつかしくして忘れ易きなり

又易學難忘　**書筆之博藝**

書筆の博藝ハ稽古する時ハ覚えやすく遠くなりても忘れぬなり書筆ハひろき藝なりと

但有食有法　**亦有身有命**

亦身有バ命有り

猶農業を忘れず

必ズ學文を廢ること莫れ

故ニ末代の學者

先此書を案び可し

是學問之始

命ある物ハ喰口と云ものありてくらはねバ命を求と知って大切にすべきなり此体の命ハ食によつて立つべし

猶不忘農業　**必莫廢學文**

百姓の農作に辛苦することを思ひ合して学文を勤むべく農業と学文とを對するに似せるハしもなれ天下の宝なれバなり

故末代學者　**先可案此書**

末代の学者とハ後世の凡人の学者をさしていふ此書とハ此実語教をいふなり惣じて学文の道ひろく儒書にハ聖賢の経典諸史百家の書多く佛経にハ諸経論歴代の釈義などの書多しかくのごとくなれども初心のものハ学ぶにむつかしき故此実語教ハ其肝要をぬき出せるゆゑ先此書を思案すべしとなり

是學問之始　**身終勿忘失**

身終るまで忘
失すること勿

是しく八実語教とさてつゝ人のゝ山ゝを学ぶ人のゝ道
分ゝるまて日子きうしゝもゝ人まゝゝとなり○論語曰子路曰
までもれと編に謝氏が注に云子路が賢ゝ止まるゝまうゝと身
終るまで編るゝゝ紀八日新にすゝむゆえんにいゝゝ故にゝゝげまゝく
ゝまゝと進むといのうゝ成りつてみれば和学の老世子とゝとゝわ
して日新ふゝしゝとゝゝげまゝて学問ふ進まゝむる教のゝゝゝく

實語教精注鈔

浪華　鄙　關牛　著

童子教

童子教八京白乗天城邦の文殊菩薩て作られ一書に名くる和
きど史八唐氏のことゝ入り世書八慈覚大師の者子又大洗安祀れ
尚の作りてわゝゝ童象と絵一巻うんゝと要ゝゝ巻も
永寿子教しゝ名けられしもの
一説に寿子教と名くることゝ八廣韻に寿八稽ゝ人生八寿ゝよゝ
寓系にいのゝ　ゝさるものゝ説文にいまゝご冠と名ざるものゝ名ゝ
ゝあゝゝゝゝてゝ八年世纂ふゝるゝ和冠ゝるゝ礼ゝゝ礼
ゝ徑紀ゝ月ゝゝゝ釈名にいゝ十又と寿ゝゝ人ゝゝ
陽寿にいう牛羊の角ゝゝと寿ゝゝ人ゝ年ゝゝ
しいゝゝゝゝう寿子と梵網ゝ八摩羅しゝ人涌ゝ寿子と
いゝゝ和名ゝ八倶ゝゝゝ教ゝ八玉篇ゝ教令ゝゝう海ゝうと
いう教令のゝ紀ゝゝいつけてゝ名ゝゝゝゝ海の字訓のゝ紀八

夫貴人の前に居てハ顕露に立ことを得不れ
道路に遇てハ跪て過よ
召事有バ敬つて承ハれ
両の手を胸に當て向へ
慎んで左右を顧ミ不れ
問ハ不れ者答へず

夫貴人前居　顕露不得立

[illegible]

遇道路跪過　有召事敬承

[illegible]

両手當胸向　慎不顧左右

[illegible]

不問者不答　有仰者謹聞

仰せ有者謹で聞

三宝にハ三礼を盡し

神明にハ再拝を致せ

[illegible]

三宝尽三礼　神明致再拝

三宝ハ佛法僧の三ツなり三礼ハ三度礼拝する事なり〇佛ハ人中の宝なり [illegible] 神明ハ一切の神を [illegible]

[illegible]

人間ハ一礼と成せ師君をハ頂戴す可し

墓と過る時ハ則ち慎め社と過る時則ち下す

堂塔之前に向て不浄と行ふ可からず

聖教之上に向て

人間成一礼

人ハ一礼をもつて人間と成す

墓所則慎

墓ハ亡霊の不安をもつて慎む

社ハ神をまつる所なれば謹て敬ひ

堂塔之前

仏殿宝塔の前にて大小便の不浄を行ふ

聖教之上

聖教ハ仏祖の書なれば尊て敬ひ

師長所頂戴

師長ハ弟子を教ひ導く者なれば

社時則下

社ハ神の所なれば

不浄行

不浄を行ふ

聖教之上に向て無礼と致ス可からず

人倫小者礼有り

人倫ハすべて人と人との朝廷ハ禁中の名にて天下に号する人々孔子

朝廷小ハ必ず法有り

人と而礼無ク者衆中に過ち有り

人而無礼者

人にして礼なく時ハ礼の表いなり又ハ衆中にもいやまちなき者

衆人交て雑言せ不れ事畢ら者速に避よ

衆中交雑言

人に対して益なきことを長話すれば人のあきるものなり

事畢者速避

事に觸て明に違ハ不
言語離るゝを得不き
語多き者ハ品少し
老さる狗の友と吠が如し

觸事不違明　言語不得離

何事にても人に約束せしことを違ふべからず一度あせしことは必ずなれ覚く違ふことあり○論語に晏平仲善く人と交り久しふして敬すといへり

語多者品少　老狗如吠友

語多きものハ恥すくなし人として実なく道に背けバつひに身を亡す孔子の言に君子ハ訥を用もなきことを云ふべからずといふも又小人ハ舌を以てものいふも皆つひにものいひて其人の徳のおとろへたる人ハ身のおもひ深さして後悔の言葉も尽きざる義ハつひて恥あり又小人ハ其身に居を得てても恥なく己が心に従はかざる事を遠ひて益の少きぞ逸物の犬の年よりハ盗人のありとも君の年老ておのが友をみるハかまびすしきまで何の用もなきと小人の無益の言葉多きハたとへていふ○離騒経に云人ハ多言をもつて其犬ハ吠るをもつて悪しとせず

懈怠の者ハ食を急ぐ
痩る猿の菓を貪が如し
勇者ハ必ず危こと有り
夏の虫の火に入が如し

懈怠者急食　痩猿如貪菓

物事に怠りがちなるものハ追居して食物をおもひとかくする猿のおのれをたらさず働けバ情を出せバ食るものもなきものゝ○出曜経に云譬バ飢たる獼猴の熟しる菓を望み見るがごとく身胃を荊棘に投ず

勇者必有危　夏虫如入火

勇に仁義の勇血気の勇とて二つのかはりあり仁義の勇ハ忠臣とおのれを捨て命をおしまず君をまもりて後を残す事をいふ又血気の勇ハこゝろに仁義なく智謀もなく只強きをたのみ命をかろくおもひてみだりに戦ふ事を好むをいふなりまた血気の勇をさしていふなり血気をやぶれハかならず危きことのみ多けれバ山谷に侍ふものハかならず死にいたるもおなじ夏の虫飛蛾燭にむかひて死禍を甘ずるにたとへていふなり

鈍なる者ハ又過ち無し

春の鳥の林に遊ぶが如し

人の耳者壁に附く

密かなる而も讒言なること勿き

人の眼者天に懸る

隱れて而も犯し

用ること勿れ

車ハ三寸の轄ひを以て千里の路を遊行し

人ハ三寸の舌を以て五尺の身を破損し

口ハ是禍ひの門

舌ハ是禍ひの根

口と使鼻の如くなる使者

身終まで敢て事無し

使の字二度かくるもむべし

人ハ三寸の舌を以て五尺の身を破損し

人ハ目づゝの舌を以て一分ともそこなふ〇鶴林玉露小堂々たる八尺の軀三寸の舌を聽こもるまて

つよ詩ひつ又史紀の張良が世家云今こ三寸の舌を以て帝者の師

たり又索隱云舌ハ小在て長さこ寸半玉衡1象る

口是禍之門　舌是禍之根

口ハ是禍ひの門舌ハ是禍ひの根

使口如鼻　終身敢事無

鼻ハ口のつくるなり口にもそなはりてもおとること一生もさこひハ

もなしもし鼻の如くなる口の虎狼を害し舌の利剣を

終つにとして鼻のおとること

なきもしこしめバ

使の字二度

かくるもむべ

過言一さい出せ者
罵追も舌を反さ不

過言出せ者 罵追も舌を反さ不

過言とは云紫のいひのやまうあり手を云ふ一つ口ばうあれば
たゝく邪るうて追ふも舌と追うするあり口邪るうハ
車一ぞと云ひるゆえ
見賢が説き論語と
舌と追さいハ文字のやまれる反返のまと
及の字にあるゝて及んぐゝらう

白圭の玷ハ磨く可し
惡言の玉ハ磨れ難し

白圭玷ハ磨 惡言玉難磨

白玉玉あり玉ゝきぶりハ磨ためバ手かゝれてうとの
おゝゝゝうゝゝうれあるれども人の言葉のゝゝゝるゝいひ
ゝぞハゝゝうどれみぐゝもゝもハ再度
元の玉ハあるがゝ

禍福者門に無し

禍福者門 唯人主不招

唯人の招く所に在り

禍ひも福ひも門戸のおのゝひゝゝるあり左傳ハ閔子馬ゝの語とつゝと

天の作る災ひハ避可し
自作る災ひハ逃れ難し

天作災ハ避 自作災難逃

書経大甲云天の作せる孽ハ猶違べし自作せる孽ハ逭べからゝと
天の災ひハ禍福高下余流ゝ病あゝて人と換ばもゝで天変と矣と
ゝひてゝのれバ山ゝざゝいのゝゝゝゝゝ
災ひハゝ孽ゝ

夫積善之家ハ必ず餘慶有り矣

夫積善之家 必有餘慶矣

易文言曰積善の家ハかゝるゝゝ餘の愛ゝうたゝゝ名相とゝゝる
ハ餘愛ゝうゝてゝ孫の赤ゝゝも始ハ昌ゝゝゝゝ

又好惡之所ハ必ず餘殃有り矣

又好惡之所 必有餘殃矣

惡ゝゝとぬむあゝハかるゝゝ天のふくゝみつゝかゝるゝうゝりひゝゝゝ
さゝゝゝの餘殃ゝかゝうて餘ゝゝ紙ゝたゝあゝゝはゝゝゝ

人と而陰徳有生ハ必ず陽報有ル矣

人と而陰行有れバ必ず照名有ル矣

信力堅固の門ニハ災禍の雲起ること無し

念力強盛の家ニハ福祐の月光と増す

心の不同おろ面の如し

譬バ水の器に隨ひ如し

他人の引を挽不

他人の駄に騎不

人有陰徳必陽報

人有陰行必照名

信力堅固門災禍雲起

念力強盛家福祐月光

神佛と志をろこの法華経を受持して天のたまをけうよう災禍の雲これをうて福祐の月光と増ぬ

心不同如面 譬如水器

人々心の同じからぬハ各自のかたちなるごとくもろもろの心ハ各自のかたちなるごとくにして揺らぐものぞとそをしれ

思ひ乃形ようつてゆくも角もあるたとえなり○後漢書に戸子云君ハ杆のごとく民ハ水乃ごとし杆方あるときハ水も方あり杆圓なるときハ水も圓なり

不挽他人引 不騎他人馬

おれハ他人の引をもとどめ我りのやうにして牽ゆくおれハ他人の駄をもとどめ我りのやうにして騎ゆくなり

大公武王ホ謂て云他の引と挽ことを好むと七奴とん他の駄に騎ことを愛もるとハ賤とん無門関に他の引とび挽ものとあれ他の

馬車ハ騎ることもれ他の船とでんぞることもうん
他のまぎれをおるることをこうえん

前車之覆るを見てハ後車之誡めとなす

前車之覆　後車之誡

車の字を「シヤ」とよみもつぱせるハいつ〳〵「キヨ」とよむべきなり書言故事の編語の大車小車の支の注ハ車の字を居のちえとしいつ

おゝ〳〵キヨのこえとしヤのこえとをよみまちがへる皇朝類苑くに書言故事に前代の事とかんがるに覆車のつまり〳〵とこゝのあれハとろしのせもつて紫あり此ハ文漢書の賈誼の策もいつ卓氏藻林に後車ハ馴車なりとこゝのちえのちえハ

前事之忘れ不と後事之師とす

前事之忘れ不と後事之師とす

ゆく車がいつ〳〵たをくつがるとこゝを後ろゆく車のんぶるとこゝ慶らぬと後車のいましめとつく

文選勧進の表に前車の覆れに後世元龜あり〳〵いるごとく前〳〵たるをたをして後の車のちえ〳〵千年ハ拙〳〵ちえ

善立而名流る

龍極つ而禍ひ多し

もく後のよ本とるるなり凡山つまり万車ハかもつたくバ
殷の紂王もどの悪王世とつづくしるハ文王武王もどのいまし先
とゝなり周の世〳〵〳〵天下を治めたまふ
あをを治むるの龜鑑〳〳〳〳

善立　名流　龍極而禍多

善立ハ善名をとゝ流布をとゝ〇龍ものきゝをもれバ禍ちゝ
悪事多く極ハ、わざわひ〳〳〳〳るものく史紀の韓非傳に儒の
孫よ殺ゞきゝの車にのり桃のつまりと若ものゝ龍ものゝ
〳〳〳〳二つのこと大ひもの龍ものゝて絶せられぬ龍ものゝ
多く婦女ものゝ北斉の高緯帝ハ潘妃とつる美人と愛して
周の武帝にもろぼさる周乃幽王もさる紀の褒姒とのいして玉と
もしもい唐の玄宗楊貴妃と愛して安禄山がむかんともさゝ
縁〳〳後とゝしるゝ人ものれ皆龍ものゝさゝまるゆゝて多くまぎゝひ波
おゝ〳〵ものり列女傳ハ陶合子が妻の云たのゝきハまりてかゝ〳〵

人ハ死而名を留め
虎ハ死而皮を留む

かなしみある禮記曲禮小田おごりをながくすべからず欲をほしひまゝにすべからず志しをみたすべからず樂をきはむべからずといへり漢の武帝の秋風辭にいはく歡樂きはまりて哀情おほしと飄蕩おもしろくてかなしみ多しと是その和漢ともにその例おほかる也

○平家物語に祇王祇女兄弟のもの佛といふ女にみかへられて清盛の寵愛おとろへ世の中をうらみて嵯峨の奥に草の庵をむすびたちこもりけるに佛もそのこゝろざしのあはれをかんじて祇女が庵室に尋ねきたり發心して尼となりて深宮の人の佛門に入て後の世のためにはげまし文治元年二月十五日佛祇王祇女母の刀自大往生をとげしといふためし

人死而留名　虎死而留皮

人ハ死してかくちはつるとも名ハのこるものなれば死したる後代々に汚名をのこすなかれ白氏文集にも龍門不上の大へに一骨と埋ぬ名を埋ずとみえたり格物論に虎ハ山の獸の君なりかくち猫のおとし大いなる事牛のおとし黄なるかくち黒き

國土を治むる賢王ハ
鰥寡を侮る
こと勿れ 奥

あやかゝりあくり虎の子と豹とハ李時珍が本草綱目にかくち虎に似て小さく毛いろやとゝろどる其術のあやしくあるものを金錢豹といふ妻にしつらくしにより虎ハ死しても其皮のこりまるを用ひらる人として八精切なるして死して後の手本となるべきものあり韻府に君章ｶ王彦章が人ハ死して名を留め豹ハ死して皮を留むとかくり不同じ

治國土賢王　勿侮鰥寡矣

賢王とハ聖賢の法をもちて政事を心としていへ王家をおさむるの君をいふ書經に文王の徳をほめてよく徳を明にし罰を恤み敢て鰥寡を侮らずといへり鰥寡とハ年六十にして妻なきを鰥といひ五十にして夫なきを寡といふ是共にも老を寡といひ大戴禮にのせたり○孝經云國を治むる者ハ敢て鰥寡を侮らず而を況や士民をや孔安國が注に云鰥寡の人ハ人の中にも弱きものなればみだりに侮るべからずまして士農工商とや礼儀をもつてすべしといふ心なり

君子人を譽不バ則ち民怨を作れ矣

君子不譽人 則民作怨矣

王制に鰥寡の孤独廢疾者は天民の窮ぬる者也と云

よ小の者は貴人を譽すぐし若切なるとの褒美せざるを民怨を作れ矣と云

入境而問禁 入國而問俗

他所の玉境に入るとは其の制禁風俗とを問ひ知るべし

やうにすべし○禮記曰竟に入て禁を問國に入て俗を問

入鄉而問諱 入門而問諱 毋數人迹

一鄉一里に入ても其の俗法に背くべし俗に逆せざる様にすべし

ひにそむかせざるべし

主人を敬ハ人が爲也

禮記に門に入て諱を問ふ人の門戸に入て先主人の諱と同じ

べしとあるを例にも禁ぜざるべし

君所小ハ私諱無 二の尊号無也

君の諱は私諱と同名なれば君と同名なれば改めるべし

名の例なり君の諱は二つと尊号なるべしと云

愚者ハ遠慮無 必ず近憂ひ有可し

愚者は遠慮なれば必ず近憂ひ有

管を用て天を窺ガ如し

如用管窺天 如用針指地

錐を用て地を指に似り

神明ハ愚人を罰に非ズ殺ハ懲さんが為なり

師匠弟子を打ハ悪むに非ズ能令が為なり

筅の穴より天をのぞかバ天が筅の穴ほどに見へ錐をもつて地をさせバ針ほどの地がみゆるなり見識のせまき者ハせまくして智恵の

をよバざるをたとへしなり○荘子曰筅を用ひて天を窺ひ錐を用ひて地を指ハ甚小さからずや

神明罰愚人 非殺為令懲

神明とハ天照大神を始め国家鎮護の神といふなり神明ハ神も仏も

悪をなすものの罪ハ罰をあたへ給へども其おろかなる人を

ころさんとにハあらず其罪をおもくせずして懲しめの為に罰を給ふ

懲悪の為なり全く害せんとにハあらずと戒しめ給ふ

師匠打弟子 非悪為令能

弟子とハ学問の為に師匠に随ひて教を受る子をいふ弟子を

又人ある時ハ師匠より後にむまれて弟子といふ其心のまよひを師匠

より生まるゝ故に弟子といふ師匠を親の如く敬ひて弟子と

いふ師匠ハ親の如くなれば弟子ハ子のごとし其子を

師匠の教にしたがハざる弟子をいましめんとて打擲するなりしかれども神明の

罰と同じく弟子を悪むにハあらず其者をして能ならしめんが為なり

是を打ちて其身を責るハ孔子の原壌が足をあげて坐せしを杖をもつてうちしも原壌をにくみてうつにハあらず

よからざる所をいましめんと打擲したまふ也仏も同じ

打擲せらるゝこと涅槃経に見へたり

生まれながらにして貴き者は無し 習ひ修して智徳を成す

生而無貴者 習修成智徳

人聖人といへども生れながらにして知るものハなきなり

学文を習ひ修して智徳を成し貴き人となる論語に学て

思ハざれバ罔し思ふて学ざれバ殆し朱熹の註に学ハ習也

おこなふ所なり程子曰学ハ人の学び尽さざる所を学ぶ

ゆゑといへり○覚賢が抄書に聖人ハ生れながらにして知る也

徳をおさめ及バざる学んで道に叶ふハ賢人なり是ハ一応世の儒

教にまかせて言ふなり出世間の道ハ精進の修習をなすべく

般若の智徳も修行によるなりといへり

貴ル者ハ必ズ富不
富る者ハ未
必貴ラズ　未

未ノ字ニ点カヽル

○禮記云夫子の元子もとうとう色なく久の名あり愚謂佛書と見るに十ずつて經と半一ホ
とけるに佛ハ化の名と為て大ひもうし經書ホ化と云て
44章ノ教ハ系佛典に上るに經徳と半ーしかけるうろ孔子曰
半れもぐーうして紂まる老ハ上ろう学んで紂る者の德ありといれハ
紂る徳と紂ハ儒ハいゆる紂人と称すと孟子も
紂人と称すと孟子も
いつう

富貴不淫　富者未必貴

紂る徳いうて半ル人ハ大方貴ーく富る人ハ大方紂る徳ありのこ
孟子ホ陽虎曰富とすれバ仁ならずバ仁とすれバ富ばしいつう白氏
文集に云ル者ハかるべ賢る貴下ル老ハかるべ貴ろうべ
もいつう源信大師要集1曰富者ハ未ル貴ばる妻ありがうえん余ち
るべ老ハ未かるべ富ばいつ認ひう余ろ1ハ富と半ル老ハ
二ハるべ得ばるとさうせう

富ずと雖心1欲多ハ是を名けて貧人と為

貧し雖心1足と欲をバ是を名けて富人と為

師の弟子ホ訓ヘ不是を名けて破戒と為

師の弟子を呼責ル

雖富貴人欲　是名貧人

金銀を多く給へるべ雖ども心に欲多ハ是と名けて貧人1貴ばるべ
ばれとある城條徳ありの

雖貧人欲少　是名富人

貧ばるとも欲すくなく心1足ることを知ばれるべ富人
なるべ人や千ル人ハ是即極人なり顔子の貧ーて泰然ーても
乐ーをいうーうあざしを孔子も賢哉回と誉ーるのうえう
佛説ーも足ることを知ル者ハ第一の乐ーと涅槃經にしけり

師不訓弟子　是名破戒

凡師道ーる人弟子を破戒ハ是破戒ーとやーしるるーう

師呼責弟子　是名持戒

師の弟子を呼責ル是を持戒ーとあるーくさん戒ハ

是を名けて持戒と為

悪き弟子を畜へ者師弟地獄に墮

善き弟子を養へ者師弟佛果に至る

教に順ハ不弟子ハ早く父母に返す可し

和不者を寛と擬すれバ

畜悪弟子者　師弟堕地獄

師匠弟子の悟を呵責ハされ即ち善戒をたもつとしるべし　弟子を見んして道をおしゆるを持戒といふ

あしき弟子をやしなふハ師匠のいやまふくまでをそむき悪ひおしけこ師弟ともに地獄に落るとしられ師弟ともに悪をなすなゆへ

養善弟子者　師弟至佛果

よき弟子の出来るハ法に依て師匠のおしへのよきゆへなれバともに仏果にいたるべしとなり

不順教弟子　早可返父母

師匠のおしへをきかずして悪行をなす弟子ハはやくその親里へかへすべし是師匠の恥をさくるなり

不和者擬寛　成怨敵加害

怨敵と成て害を加ふ

悪人に順つて避不バ繋る犬の柱を廻が如し

善人に馴て離不バ大船の海に浮るが如し

善友に隨順もき者麻の中の蓬の直るが如

柔和ならざるものをよく是を見んずるをバかへつて怨をふくみ欲のおこくなりて害をなすとしるべし　寛にと擬すればかへつて寛の字をよくさぐるとしてつゆくることあり　擬ハ儀なり

順悪人不避　縲犬如廻柱

悪人にちかづくとしてはなれざれバ世に嫌はれて廣く人にきらわるゝこと柱につながれたる犬のめぐるがごとし

馴善人不離　大船如浮海

善人になれしたしめバ自らも善にうつりて心が広くなること大船を海にうかべるがごとくなり

随順善友者　如麻中蓬直

よき友にしたがへバ麻ハすぐなるものゆへその中に生る蓬もまつすぐに生ずるごとく善人になる

惡に友に親近すれ者
藪の中の荊の曲るが如

親近惡友之人 如藪中荊曲

藪ハ大沢もり多ゆるして草本ゆるしの人千中に生むこと雜ちと
のゆゞしくそびえるゆゝ惡友に近づけバ自身放逸に成ごとく

祖の字を離れて文の文あり祖師ハ子孫の師匠と載れ人なり戒定
ヲ子にかゝゝ親戚一族とさして祖ハ子孫に付ハ者

祖師を離れ師に附
戒定惠の業を習へ

離祖付師 習戒定惠業

しれそむとゝるれてうとれ他人の師匠と載れ人なり戒定
惠の三学を習へとなり戒ハ初門にいもしもむるう戒の者
又戒ハ戒十善戒二百五十戒ちどいて教法にれ多ゆこと者と
三つのとがをとゝせぐ1いう意角身ゆあり比丘ハ比丘尼
ちれ云ふと出され云ゝ惡とたくまねとこゝの戒ちいとあり
況ゝ定とハ天竺の云禁ゝハ三昧ちゝ慧ハ定ちゝ我ち
ん一つをちりてちゝの惡ゝにうどうねと定ちゝ上くゝ上ゝハ景德
傳燈錄の弘弁禪師の説名義集に見へ

根性ハ愚鈍
なりと雖
好ハ自ら學
位1致る

根性愚鈍 好自学位

親の内とゝるれ嚴毛一逢の師匠と載ひて戒定惠の業と載ひ
くげりバたゝひ根性ハ愚鈍なりも学者の位1いるゝ位学位の学よの
字覺の字と爭耕の字ゆ出るゝ毛ハ佛の位と覺位ちゝ人ゝう
天竺に佛陀ちゝと涅槃ちゝハ覺ちゝ人覺位ちゝ人佛界ちゝ

一日に一字
を學べバ
三百六十字

一日學一字 三百六十字

一日一字づつ習ひて一年に三百六十字覺ゆゝ毛ハ三春
ゝ来年の三春まで一年の日数と定ゆるゝて三百六十
日ゝ加るゝ我れ1て八苦ゝ学ゝ毛ゝ一年の日ゝ
する毛ゝ三百六十五日ゝう

一字千金に
當る
一点多生と
助く

一字千金 一点助生

一字の價と直段せバ多の金ゝ毛ゝ史紀の列傳1
呂不韋ゝ人呂氏春秋ゝ人書と作ゝて咸陽ゝ人市乃

一日の師とも疎まず。況數年の師乎や。師者三世の契り、祖者一世の眤し

門につられる書物と千金の金をかけおいて此書に一字をそへかへるともする人あらハ千金をとらすべしと出おかれる故事なり。彼呂氏春秋の書ハ今に傳りて天下の宝とあがまる。又前漢書韋賢が傳に黄金滿籯をのこさんハ子に一経をおしゆるにしかずとあり。經に一点多生を助くとハ文字の点一ッと覚ても多生の助となるなり。法花靈驗傳に法華経の一字を書なるひハおしみの点をうち又破のれといつくしまつくの罪根あれども地獄をまぬがれて人界にうまるる故事なり。是ハ一点多生をたすけるべきゆへなり

一日師不疎　況數年師乎

一日にても物習ふ師ハ師道なりおろそかにハすべからず。まして年久しく教をうけし師ハすぐく大切におもひ敬ふべし

師者三世契　祖者一世眤

師ハ三世の契とハ親ハ一世のむつましといへるハ大般若経の中に出。在家の人ハ師の恩父母の恩といふも帝し在家の人ハ父母の恩師の恩よりも重しとなり。然らバ此意ハ仏法修行の為よりいふなり。その由ハ父母ハ現在一生の身を育てやしなふ恩あり。佛法の師ハ過去現世未来の三世の惠みを与ふるとやあるべきなり

弟子七尺去て師の影を踏べからず

弟子去七尺　師影不可踏

師道の影を踏ざるべく七尺人退くべくもあらくて行べきなく。長阿含経及び尸迦羅越経にハ弟子師に仕ふるハ五事を説り。師ハ三世の契人祖ハ一世のむつましといへるハ釈氏の三世流転の説なれバ志ふかくおへて弟子なる世教によりて考ふべし。孔子弟子に教へのよしにいひて後れ文行忠信なり。世師なる道なり。父母あれども教育せざれバ人となりがたし。び師道の教へなり。されバ人なる所を知ることあたハざる主君の恩ひふハしざれバ父祖の業を立がたし。然れバ親と師道とハ主君の恩をも何れも等しく命にかくてつかまつるべきもの也。楽共子が三事の説よりつもしかるのみを経にのべてくたり又七尺去て弟子たらんに心ざし師を敬ふ事あり又よく道を行ふべし。師道とハ学べども辞義

観音ハ師教の爲ホ寶冠ヲ弥陀ヨ戴く

勢至ハ親孝の爲ホ頂ヲハ父母の骨を戴ク寶瓶ホ白骨を納む

そぐ〳〵れ孔子も弟子ニ優らぬとの〳〵まうす

観音師教　寶冠戴弥陀

観音ハ阿弥陀如来の使者なりとの給ふ師弥陀と冠の如くいくばくの人ハ師教と頂戴するの義なり龍樹十二礼ニ云へ

なり又大日經ニも繞ひ寶冠と云ふ

勢至親孝　頂戴父母骨

勢至ハ父母孝行のゆへニ頂ニ舎利をいただくの寶瓶ニ入

寶瓶納白骨

たゞ〳〵のつぼ也〇一説ニ云ふ父母の骨と頂戴ひて又下ニ寶瓶ニ白骨を納むとハいかゞ後の人の注解のまゝ

朝ハ早起て手を洗ひ意を攝て經巻を誦せよ

夕ハ遅寝て足を洒ぎ性を静て義理を案ぜよ

習ひ讀とも意ニ入ずバ酔寝て讃を語るが如し

ものゝ〳〵と雖ども心実信者ゆゑの二教ハ強ちなる人乃

えらびなく幸ゆ学ぶ釈尊勢至の二菩薩も師教ゆゑ学ぶ

教の巻書を深くものゝひのゝ人と

せよとまうす

朝早起洗手　攝意誦經巻

ものゝ人ハ学ぶ者ハ朝ハ早く起て手を洗ひ心を攝て経巻を誦ずべし

夕遅寝洒足　静性案義理

夜ハ遅く寝て洒足をもつて初て学問の義理を案ずべし

性しハ人ニ生れ付る所なり来るも性ハ心の善なるゆへ

習讀不入意　如醉寝調語

学ぶとハ酔てうゝとよみ掛とする ハ酒ニ酔てものもいはぬ

ごとく同じく元次山が寝語ニ案中の孫云ふ

千巻を讀も復せずば財無して町に臨むが如し

漢文寒夜復 財如隣町

薄衣の冬の夜も寒を忍で通夜に誦せよ

薄衣冬夜 忍通誦

乏食の夏の日も飢を除て終日に習へ

乏食夏日 除飢終日習

酒に醉ば心狂亂し食過ぎば學文に倦む

醉酒心狂乱 過食倦学文

身を温にすれば睡眠を增身を安くすれば怠惰を起す

温身增睡眠 安身起惰怠

匡衡が夜學の爲に壁を鑿て月の光を招く

匡衡夜学 鑿壁招月光

孫敬が學文の爲に

孫敬学文

戸を閉て人を通さ不

蘇秦ハ學文の為に錐を股に刺て眠ら不

孫敬ハ學文の為に縄を頭に懸て眠ら不

車胤ハ夜學を好んで螢を聚て燈に為矣

宣士ハ夜學を好んで雪を積て光と為矣

休穆ハ意に文を入て冠の落ると知ら不

孫敬字ハ文宝楚郡の人なり学問をこのみ人来きたれバ妨げになるとて家の戸を閉て人との交りを出せしく後に閉戸先生と称せらる

蘇秦為学文　錐刺股不眠

蘇秦ハ戦国の世雒陽郡里の人なり十年学文を勤めて家にかへりしかバ其妻これを見て機より下りもせずして答もせず父母も妻も機に布を織て居たるにものも言で不興なりしが蘇秦のくちおしく大丈夫の終に遂せ[illegible]ハ妻も兄嫁も悔るにもしもとて其の後鬼谷先生を師として学文をなしけるに夜もすがら眠らず自ら錐を股にさして眠を覚し一寸の日足ざるをもおしみて学げしかバ後に終に学問の功積りて六国の相となり六国の印を佩て我家にかへりし兄嫁も我妻もかくまかしくなりたるハむかし夜も寝ずより起出なりしと謂あり

孫敬為学文　縄懸頸不眠

孫敬ハ孫の縄をもって孫敬なり縄を梁より下て首にかけ眠をさまして学文をはげみしとなり

車胤好夜学　聚螢為燈矣

車胤字ハ武子といふ南平といふ所の人なり年若にて学文を勤めて夜も書をよまんとすれども家まづしくて燈の油なし故に夏の夜ハ絹の袋の中へ螢をあつめて光となして書をよみ日につゞきて学文せしゆへ後に学者の名を世に知らる又終に吏部晋書の官となられり

宣士好夜学　積雪為光矣

宣士字ハ孫康といふ舎稽の人なり貧にして燈火なく冬の夜ハ学をするに雪のひかりにて書をよみ後に学徳ありて侍中の官となられり

休穆入意文　不知冠之落

休穆字ハ周礼といふ河陽郡といふ所の人なり宣帝につかへて後に官となりける常に御来するとも書をよみてつねを放さずある時ハ

学文のあらつに始て乃ち為て能ふて彼らつる寇乃為
こゝも知べしとなり

高鳳ハ意に丈を入て麥之流るゝを知ら不

劉寛ハ衣を織り乍ら口に書を誦して息を不

倪寛ハ耕作し乍ら腰に文を帯して捨て不

高鳳ハ意に丈を入て麥之流るゝを知ら不

高鳳字ハ文通ら て南陽の人うり百姓にて学文とぬ〻 豆を売れ
書とゝみ麥をうゝ邑 或時麥と不し丈とをうるゝ学文せゝ俄に
麥うり乍て麥の流を一去るとも去〻ゆる麥ハ麥ハ麥と同ふ
焙てゝい出〻るゝ 学文に入て天下に名聞の誉と成ぬ

劉寛ハ衣を織り乍ら口に書を誦

晉の劉寛字ハ子大 ゝる唐の人なり 衣を織〻 半の衣とをりて
世を渡ゝ学ゝその業もゝなゝ口の中に書を誦むゝ

倪寛ハ耕作し乍ら腰に文を帯不捨

倪寛ハ孔安国に法ゝて学問と勉むつゝやとゝれて耕作しあり
らも腰に書物を帯て常に学文せゝもの

此等の人者皆晝夜學文を好んで文藻國家に満つ遂に碩學の位に致る

此等の人者皆晝夜學文

文藻國家に遂に碩學の位に致る

右匡衡ハ日ト倪寛ハ夜ぬんで学文せゝ
操ゞ國中に了ぬうて天下の大学者ともゝ
ゝみゝどゝ 例ば乎 名天下にも ゆゝハ文学の徳の大ひなゝ
碩学ゝ碩ハ大の義なり 大学道に始まるゝ

緝麻を振筒に恒に誦書論

たゝ双六やうのものとして打ちもはゝ平生に書と
まゝ漢の年代ハ後なるほどゝ学とぬて世の名誉ゝる者
又弓矢などの武ゝ一ゝ学ぶゝも操に書物をつけ
いゝ法のゝ

又削弓矢腰に挿文書

張議新古を
誦せバ
拈木菓くを
結ぶ矣

亀蒙史記を
誦せバ
古骨亶づ
くを得り矣

伯英ハ九歳
にして初て
早く博士の
位に到る

宗吏七十に
して初めて
學を好んで
師傳に登る

張議誦新古　拈木菓矣

張張ハ魏人なり始め冤先生を師とし学問の功ありて一切古今のるゐをぜんぶ拈ハ結ぶ拈木も菓也て花咲菓と結ぶ斗に成りしと

亀蒙誦史記　古骨亶矣

張亀蒙ハ元の代の人百年その出世を待ちくしこそ無きて史記を傳ばを古やれる骨も肉つきを育うくせうにえくしく

伯英九歳初　早博士位

伯英字ハ長元ちなて張那の人なく又冤て又待とよくはくれり七冤にして博史に達し九冤の時博士にもそう博士の位の初の友

宗吏七十初　好學師傳

宋史ハえ百姓にて農業をとるくせしが冤七十に及びて初めて学ぶ文章ざ全数つくりて師傳を師とし師ハ天子の師道

智者ハ下劣
なりと雖
高臺之閣に
登る

愚者ハ高位
なりと雖
奈梨之底に
墮つ

智者の作る
罪者
大かまくも
地獄に墮ず

愚者の作る
罪者
小るれども
必地獄に墮

智者雖下劣　登高臺之閣

智者ハ下劣なりと雖高臺の閣に登る

愚者雖高位　墮奈梨之底

愚者ハ高位なりと雖奈梨の底に墮つ

智者作罪者　大不墮地獄

智者の作る罪者ハ大かまくも地獄に墮ず

愚者作罪者　小必墮地獄

愚者の作る罪者ハ小るれども必地獄に墮

愚者ハ常に憂ひを懐く
譬バ獄中の囚れの如し

智者ハ常に歓楽に
猶光音天の如し

父の恩ハ山
岳も高し
須弥山尚下し

母の徳ハ海
底も深し
滄溟の海還て浅し

愚者憂懷如獄中囚

智者歓楽猶如光音天

父恩高於山須弥山尚下

母徳深於海滄溟海還浅

馬鹿なるものハんぶくれるあくに成て囚人の獄舎に居しむがごとく
元ぐ為なるわゝ二法念絡ハ人間ハ夫ゝて智者ハ憂へと懐こゝろ

かゝる人ハ清浄なる安穏なる光音天ハ梵ち三十三天乃内
あり山天の人ハあつるもあくにろ清光を放ち明る光を花ハ自至こ

もゝう須弥ハ十二由旬のるハ父母の恩ハ高くせるこゝをあらす
父の恩ハ須弥山ゝて世界第一の高山ゝもゝろうに高ゝ

母の徳ハ海底深ゝて海ハ大海の底にいろ深
さ九万由旬あるゝと下学ハ集ゝ見くゝろ

白骨者父の
滋赤肉者母の
滋赤白二諦和
して
五體身分し
成る
胎内に所る
ゝと十月
身心恒に苦
勞に
胎外に生れ
て数年
父母の養育
を蒙り

白骨者父滋　赤肉者母滋

父ハ白ハ骨ハ父の滋精ハ骨ハ肉ハ母乃滋精なり
いんせいハ骨ハ肉ハ母乃滋精なり

赤白二諦和　成五体分

赤白二ツ諦和し合て人と成るゝ五体ハ元あり五ろう分ハ
肉血すで軟るる者ハ母ゝろ世じ血箱骨法の堅硬ものハ父ゝう生ずるゝ

所胎内十月　身心恒苦勞

胎内ゝやゝろ十月乃内ハ
手ゝ苦ゝ苦ゝハ人のゝろゝ人ハ生ゝ

生胎外数年　父母養育

胎内ゝろ出て後のゝ
成ゝ長するゝ父母にやゝ育てらゝ

畫者父の膝に居て
摩頂を蒙ること多年

夜る者母の懷に臥て
乳味を貪り
六十餘解

朝さに山野に干交て
鹿を殺して
妻子を養ふ

暮に江海に臨んで
鱗を漁して
身命を資け

且暮の命を資ん爲に
日夜惡業を造る

朝夕の味ひ
嗜む爲に
多劫地獄に
墮つ

恩を戴て恩
を知らず
樹の鳥ち枝
を折ふ如し

德を蒙て德
を思ハず
野の鹿は草
を損ふ如し

酉夢其父を打つ
天雷其身を裂く

唐の酉夢ハ不孝の人にて或時千父とおゝ撰せしが天俄に雷鳴して酉夢をつゝきさき裂き五日斃て了死するを見てあけ居さ居しに

班婦其母を罵つて
靈蛇其命を吸ふ

班婦字ハ才女にて紅人なり老母にむかいいうの言葉

郭巨ハ其母
孝養が爲に
穴を堀て金
の釜を得る

郭巨ハ後漢の世の人にて孝母に孝を尽せり一子を生る家貧
なり老母の食を減ずるを忍ずこれを再度
いひ母ハ子ハ再び得べし孝養を絶ては
ならぬと埋んとせしに地を堀り
るに黄ひもとに黄金一釜を得ること
あるこの釜ハ景教の制ハ斗一石の後世ハ石
もて釜ふ謂ひ天賜孝子郭巨官不得奪人不得取と記せり

姜詩自婦を
去て
水を汲ふに
庭に泉を得

姜詩ハ母に事て孝行なり千母老て井あり水いれば生ず妻ハ
七八里の所を通てこれを汲ふ母日汲ふ或日風雨に逢て日暮
舟湯れば姜詩大に驚て妻を責ぶ妻ハ
事しらず人をやりてこれを尋ねに
庭に泉涌あて魚あり母食

孟宗竹中に
哭いて
深雪の中に
筍を拔く

孟宗ハ母の尹にて竹の林
にて天に祈りもげれども竹の林
の中に行乃ち

王祥鞭ひて
氷を叩けば
堅凍の上に
魚踊る

王祥ハ後母に事へ孝行なり母
に虐しに成て母の幸ひに逢ふ
に成て或夜母に生魚を乞ふ
少し王祥赤裸になり氷の上に臥
り出さんとすれば氷の上に魚
踊る

舜子盲父を養ひ
涕泣すれば
兩眼を開く

舜子盲父　涕泣開眼

舜子は始め百姓にて父と継母と弟と三人なり継母は弟を愛し舜を憎む継母弟に食を与へて舜に与へず舜は父に食を乞へば継母弟に与へず舜は父に食を乞へば継母弟に与へず舜は父に食を乞へば継母弟

此等の人者皆父母に孝養を致し

佛神憐愍を垂て所願悉く成就し

生死の命は無常なり早く涅槃を傾し可し

煩惱の身は不淨なり

速に菩提を求む可し

厭ても厭可は娑婆なり會者定離の苦しみなり

恐ても恐可は六道なり生者必滅の悲しみなり

壽命は蜉蝣の如し朝に生て夕に死し矣

身體は芭蕉に如し

此等の人者皆父母に孝養を致し

佛神憐愍を垂て所願悉く成就し

生死の命は無常なり早く涅槃を傾し可し

煩惱の身は不淨なり

速に菩提を求む可し

厭ても厭可は娑婆なり會者定離の苦しみなり

恐ても恐可は六道なり生者必滅の悲しみなり

壽命は蜉蝣の如し朝に生て夕に死し矣

身體は芭蕉に如し

風ニ隨つて壞き易し矣

芭蕉ハ風にあたやぶれるものゆゑ人の身ののうさもしばしば也ッ維摩経云是身ハ芭蕉の如く中に堅なしと有事也

説るゝ所ゝ隨類往生経云四大假ニ合して形ち芭蕉の如く中に実なるこゝろ也

綾羅錦繡者　金銀珠玉者　只一世財宝

綾ハ織物の名羅ハうすもの錦ハぬひもの繡ハうつし織物の名にて結構なれども来世の苦くるしみ有ぬ

美金珠玉者　只一世財宝

海より出る玉を珠と云山より出る玉を金と云人美金珠玉もたゞ此世ばかりの宝にて後世の為にはならぬ

栄花栄耀者　更に仏道の資けは非ず

栄花栄耀者　更に仏道の資

世ゝの時を知て花やかに栄くらすも未来を思ひ人倫の道を学ぶ事難しとなり

官位寵職者　唯現世の名聞

官位寵職者

世ゝの名聞を誉るも死せざれば威勢さらんもあるも此世ばかり

龜鶴之契を致すも露命の消不往

龜鶴之契

夫婦の中を龜鶴に比す漢書蘇武傳ニ人生ハ朝露のごとし龜鶴百千万の命なれども

鴛鴦之衾を重ねしも身體乃壞き不閑

鴛鴦之衾

鴛鴦の雄雌ともに中よく夫婦一衾に寝

仏利摩尼の殿も

仏利摩尼殿

数遷化之人

遷化の無常と歎く

大梵高臺の閣も火血刀の苦しみを悲しむ

須達の十德も無常於留ること無し

大梵高臺　火血刀苦

須達之十德　無常於留

切利天須弥山乃いくばくの方古のく八天をひろ帝釈中に居まう三十三と会もるゝあり摩尼えめ玄珠ゝらん玉の殿なきバ摩尼殿ゝらんかゝる結構あるゝも遷化して又義れわいらんなかるゝ

よくゝちん

大梵天八色界十八天の一所ち梵天上の座に居て採蓮華蓋つゝ結構氏たつゝく二つ高位ゝかるゝこゝて大寶城宝ゝ永生もゝく位ゝ程威いせわ強くゝゝ勢深勢色ゝゝ上ゝ年寿年七千歳のゆる七。

須達八衛軍王の大臣ゝして十德と俗くたる長者なれども生死苦とゝ為むゝるゆゝゝゝて孫ゝ死せりとゝ十德ゝゝ八一ゝ八世中ゝゝゝそ

阿育之七寶も壽命於買ふこと無し

月支の月と還ぜー威も琰王の使ひに縛被る

阿育之七寶　壽命於買

月支還月威　琰王使被縛

阿育八天竺の王王ちゝ七宝ゝそ一ゝ金輪宝二ゝ白象宝三に俗る宝ゝ神珠宝ゝ玉女宝ゝ主長宝七ゝ主兵宝ホ全紀初宝ゝ紀ゝ紀ゝ八万四千の塔を俗ゝ一枚の大王ゝ為れども壽命と買ふこゝの出来ゝして命を買ふこゝの

月支ゝ天竺ゝゝゝゝ還月威ゝゝ又五の梵王ゝゝゝ梵王ゝ兄弟ゝ人ゝゝ名又神通ゝゝゝ七日のゝに命終ゝゝゝゝ怪ゝ

琰王の殺鬼とのゝれん〻源孫ゝゝゝゝ海中ゝゝゝゝ

龍帝の龍を
投しかも
獄卒の杖に
打被

人を施し
行ふ可し
布施は菩提
の糧

龍帝投獄力　獄卒杖被打

南海龍王は諸龍と投し大力の者どもにて獄卒の杖にうちたれ

人を施し行ふ　命を捨て投獄

人は情け深くして命を捨て獄に投しかゝられて命を捨てゝ
布は来世の粮と為つるゆへ布施は菩提の糧

佛大王いつけなく人をいつの事なく死のがれ難し一生中法の
中にいのりて生をとゝけざるべからず二生まで老をとゝけざるべ
からず病と死とをのがれ難し死と死さるゝと活たるあり
閻王の使ゝは一切命を絶たのゝ閻魔法王獄卒と来
ゝ一人は棄縄鬼二人と棄精鬼三人と鉄鬼四人とうつり
月日の梵士が日月と月日にうつゝしる通力　獄卒もいと
しして閻王のつるひ鬼ゝるゝ人ひっ
かゝられて命絶まゝ

人を施し命を捨て投獄

人を施す法は人を食とゝいつて命を助ける
ゝ法は人を殺して命をすくふ
然施は命を捨て投獄

然施は人乃縁をもて佛道をいるれば也ゝ絶命
いつゝ人を施す者は花乃如くなり

人を施す　財宝を捨て投獄

人を施す　可生福田

人を施す　可生福田

我人をわどこすんいつゝ笑つて味はゝ他のわどこ色
見るゝ花もいとしもいとしもろと出せば実もゝどこん人とちゝじゆ
徳もるゝ世の貧女は花のあるとるて佛土一切と
さゝれば佛須弥灯光如来の紀初に接けめつ

人を施す　功徳如大海

功徳大海の如し

己が為に諸人に施せば報を得ること芥子の如し

砂を聚て塔為る人早く黄金の層へを研く

花を折て佛に供る輩は速に蓮臺の跌さを結ぶ

一句信受の力も

たとへ教人にすすめたまづらの果報の

塔婆を建て人は高顯なり金剛経の要疏に曰子

塔とは梵語なり華塔婆唐語なり高顯なり金剛経の要疏に曰子

供の折ばかりも小石を集て塔を作る人は功徳の縁なり佛乃ち

無量劫

速に蓮臺を結ぶ

一句信受の力

轉輪王の位に超ぬる

半偈聞法の徳

三千界の寶に勝れたり

上は須佛道を求頂戴下中は四恩を報ぜ可

華厳経曰若一句一偈未曾有法は必ず三千大千世界の満る七宝もて供

養諸佛菩薩の位に超ぬる

半偈聞法の徳

偈とは梵語なり唐土にて法々の字を偈と

しかるに法とは一偈なり半偈の法と云ても

千功徳三千世界の宝よりも勝れり三千大千世界の

一の日月は天下を照して光明を放て一世界一山のごとく

世界の中に多の日月の光明と一世界一山のごとく

界々の中に阿含経に曰多の須弥山の光と三ツ合せて三千世

須弗佛乃

中有数佛見

下編及二千

尋常成佛道

下ハ編く六道に及ぶ
共ふ佛道と成し可し

幼童を誘引せんが爲ふ因果の道理を注し

内典外典より出ぬ

見者誹謗すると勿れ聞者笑ひと生ぜ不れ

内典外典

因果乃理

見者勿誹謗

聞者不生笑

恩ハ天地主父母師長の恩とぞ六道ハ六十二品くるしみ人ハ別一佛法に帰依して因恩と報謝し功德と六度に及ぶ

かゝて佛乃と成れすべしとぞ

内典ハ佛恩の根本菩提の真ものゝ今幼童を誘引ぜんが爲ふ一切の外典ハ菩提の枝葉にして意趣に隨順する乃理を注し

見聞者ハ釈氏の内典や儒教の外典に生ずるものの邪法を謗ぜんの教へをもるべしとぞ

人ハ法を聞と因縁ぞと云ふ元享釈書巻の四曰釈の安然ハ傳教大師系族ぞ毋養子ぞ

にのぼるとぞ聡敏人ぞ博学ぞ

生ぜ不れ恩ぞ慈悲の室に入ひつゝろひ秘密の蘊ふ有り一乗の道に通ぜ入て真如の法と成べく凡夫の身に清浄の涅槃一四象を泡沫に迷作する不数時回答菩提心義悉曇章即身成佛義私記ぞ

元慶八年に紹して元慶寺に住して仏法河図梨の号ぞ

童子教精注鈔尾

和語陰隲

畫本新鑑草

大本全部五巻

浪華 部關牛著

古狀揃精注鈔

大本壹冊

兵庫 黑田庸行著

庭訓往來精注鈔

大本壹冊

慶應三丁卯年三月求之

京都寺町通佛光寺

江戸日本橋通壹丁目

書林

圖 貳丁目 河内屋藤四郎

同 貳丁目 須原屋茂兵衛

同 南傳馬町壹丁目 山城屋佐兵衛

同 下谷御成道 山城屋政吉

同 大傳馬町貳丁目 英文藏

同 芝神明前 丁子屋平兵衛

同 岡田屋嘉七

大阪心齋橋筋本町角 和泉屋吉兵衛

大阪心齋橋筋博労町 河内屋藤兵衛

河内屋茂兵衛版

價正九百銅也